

交流集会「すべての人々の Well-Being をめざす 放射線看護——第8回学術集会開催の経験から——」

Radiological nursing for the well-being of all people: From the experience of organizing the 8th Annual Conference

木下 美佐子¹ 佐藤 良信^{2,3} 上澤 紀子³

堀内 輝子¹ 末永 カツ子⁴

Misako KINOSHITA¹ Yoshinobu SATO^{2,3} Noriko UEZAWA³
Teruko HORIUCHI¹ Katsuko SUENAGA⁴

1 福島県立医科大学看護学部

2 福島県立医科大学附属病院災害医療部

3 福島県立医科大学附属病院看護部

4 福島県立医科大学災害公衆衛生看護学講座

1 School of Nursing, Fukushima Medical University

2 Department of Disaster Medicine, Fukushima Medical University Hospital

3 Nursing Department of Fukushima Medical University Hospital

4 Department of Disaster Public Health Nursing, Fukushima Medical University

本稿は、日本放射線看護学会第9回学術集会で行われた交流集会に関する報告である。テーマは、第8回学術集会での報告内容とその後の「すべての人々の Well-Being」をめざす取り組みについて、それぞれの立場からこの1年間を振り返り報告した。

末永は、原発事故から8年経過した年に「本学会を福島で開催できた意味」「なぜ、Well-Being をテーマとしたのか」、交流集会「福島で語ろう 1,2」の開催内容などについて報告した。本稿では、「福島で語ろう 1,2」の事前準備とその後の進展について紹介する。事前準備は、招聘したカンボジアの3人若者と、東北3県の被災者・学生・研究者とが協力して10日間のスタディツアーを実施した。訪問先は、福島県（大玉村・小高・大熊町・福島市）と宮城県（名取市・石巻市・仙台市）であった。ツアーでは、招聘者と、「津波で流された医療機関や介護施設職員」、「小高に帰還した高齢者」、「帰還できない大熊町の人々」など、3.11での被災者との交流会や懇親会も実現した。交流集会の場は、ツアーの参加者がスピーカーとなり、被災現地を“見て、感じた「被災地の今」”を伝え、学会参加者としてディスカッションする場となった。本学会を媒体としてつながったネットワークは、2つの国のコロナ禍の下でも、さらに広がりオンラインでの情報交換や交流が現在も継続している。

佐藤は、「原子力災害における汚染・被ばく傷病者への対応、看護を考える」と題し、傷病者とその家族や地域住民、対応する医療スタッフの各々の Well-Being の視点から原子力災害における看護について発表した。

現在の原子力災害医療体制において、ハード面は整備されてきたが、今後はソフト面のさらなる充実の必要性があることを報告し、自施設で実施している院内医療スタッフを対象としたセミナーについて紹介した。

上澤は「臨床の立場から放射線看護を考える」のテーマで、患者や家族の望む医療を追求するためには、放射線療法に関わるあらゆる職種間での倫理カンファレンスが必要であることを説明した。また、地域や各診療科との連携およびその方策についても述べ、放射線診療における看護師の役割を事例により具体化し紹介した。他職種で支える患者の Well-Being と、医療スタッフが正しい知識で被ばく防護し自身を守る Well-Being、原子力災害を経験した福島だからこそ根付いた放射線教育と学ぶ側の姿勢であると言えるのではないだろうか。

堀内は、「看護基礎教育で放射線看護教育を行う上での現状と課題」について、看護教育の視点で交流集会を企画した結果について振り返り報告した。看護基礎教育では、臨床における放射線看護・原子力災害における放射線の基礎知識ならびにリスクコミュニケーションの必要性を再認識したと説明した。そして、すべての人々の Well-Being を目指すためにも看護基礎教育の充実が重要であり、推進していく重要性を述べた。

第8回学術集会でのテーマについて再度語り合えたことで、これからの放射線看護への熱い思いを確認することができた。第9回学術集会のテーマは、「被爆者看護の始まりの地から、新しい時代の放射線看護学の発信」であった。次年度は、原発事故から10年の節目の年となる。今後も、原子力災害を経験した者として「すべての人々の Well-Being」をめざし、地域、災害、臨床、教育など、さまざまな立場からさらなる新しい放射線看護学の発展に寄与していきたい。